

ケアマネジメント実践における社会資源活用の視座 —エコシステムからの検討—

Viewpoints on the Use of Social Resources in Care Management Practice:
A Field Review from within the Ecosystem

相 山 馨
AIYAMA Kaori

I はじめに

現在、わが国におけるケアマネジメントは、高齢者や障害者が住み慣れた地域で生活するための一つのアプローチとして重要視されている。それはわが国のみならず、ケアマネジメントを先駆的に実践してきたアメリカやイギリスなどの欧米諸国においても同様である。なぜならば、ケアマネジメントが、多様なニーズをもった人たちが自らの心身機能を十分に発揮して、自立した地域生活を送ることを目的としたアプローチとして認知されているからである。

筆者はわが国にケアマネジメントが導入された1990年代から、ソーシャルワーカーとして在宅介護支援センター等に勤務してきた。そこでは、まだ十分に共通理解ができているとはいえないものの、ケアマネジメント実践が行われていた。そして、近年、ケアマネジメントは高齢者分野のみならず障害者分野へと広がり、在宅生活する利用者に対する主たる生活支援方法となった。また、わが国のソーシャルワーク実践が地域福祉推進へと移行する流れや、多問題家族の増加などによって地域で生活する対象者のニーズがさらに多様化・複雑化している傾向からも、ケアマネジメントの必要性がますます高まるものと考えられる。

しかし、一方で、実際のわが国のケアマネジメント実践は、介護保険との関係でその重要性が指摘されたため、サービスの提供が焦点化され、利用者主体の生活支援として機能しているかという疑問が残るところである。今日的な問題として、利用者が在宅で生活し続けたいと願っていても、身体障害や精神障害、認知症等の生活障害が生じることにより、住み慣れた家や地域を離れなければならないという状況が多くみられる。もちろん、利用者が自らの力で社会資源を有効に集め活用することは難しいため、そこにはケアマネジメント実践が必要となる。本来、ケアマネジメントは、高齢者や障害者の地域生活支援の視点から、利用者のニーズと適切な社会資源を結びつける方法として理解されている。それゆえ、利用者主体のケアマネジメントにはその利用者固有の生活をとりえ、社会資源の適切な活用が不可欠となる。しかしながら、わが国のケアマネジャーは介護保険制度との関係でフォーマルなサービスを活用するのが一般的で、それが利用者のニーズや生活に応じた支援になっていない場合もみられるのである。

ケアマネジメントは、生活課題の解決のために利用者と利用者の必要とする社会資源を適切に結びつけていかなければならない。このことは、先行研究をみる限り多くの研究者がケアマネジメントにおける社会資源の重要性として指摘しているところである¹⁾。また、社会資源の分類については、フォーマル・インフォーマルという供給主体による分類²⁾により、研究が進められてきている。そして、社会資源とインフォーマルな社会資源の適切な組み合わせが効果的な支援を可能にすること³⁾やインフォーマルな社会資源の利用は、利用者の精神面のケアに大きな効果をもたらすという指摘もある⁴⁾。つまり、ケアマネジメントを利用者主体の支援として機能させるには、わが国のフォーマルに偏った支援ではなく、社会資源をトータルに活用した支援こそが有効であると考えられるのである。

そこで、本稿では、高齢者ケアマネジメントにおける効果的な社会資源の活用について考えていくこととしたい。そして、その際には介護保険制度という限定した制度におけるケアマネジメントではなく、ソーシャルワークとの関係で広くケアマネジメントを捉えていくことに留意したい。特に、その特徴の一つとしてのエコシステム視座をもとに、社会資源を利用者の生活全体からとらえる枠組みとその活用について検討し、新たな高齢者ケアマネジメント実践の展開に生かしたいと考える。

II エコシステム概念の基本特性

エコシステム概念とはシステム論と生態学の統合から生まれてきたものである。具体的には、1983年にメイヤー (Meyer, C.H.) によって、システム思考と生態学的発想を統合した実践に有効な視点として紹介された⁵⁾。またそれは、生活をシステムの広がりとして理解するシステム思考と、変化や時間の流れから理解する生態学的視点を合わせもち、利用者の生活を全体的にとらえることができる概念として理解されている。

このエコシステムの視座は、人と環境との関係を両者が常に相互作用し、資源を交換する過程を導いてくれるものでもある⁶⁾。その後、1995年にマイリーら (Miley, K. K, O'Melia, M. & DuBois, B.) によって、エコシステムの視座が提供する実践の枠組みは、①焦点システムの確認、②システム内で何が生じているか、③システム外で何が生じているか、④焦点システムと環境との関係はどうか、⑤システムは時間とともにどのように経緯するか、の5点に整理された⁷⁾。特にここでは、利用者システムがマイクロレベルからマクロレベルへの広がりの中かで、利用者を有効な資源と結びつけたり、資源を提供するシステムを増大するために介入したりする、資源活用のための代弁的活動の実施が強調されていた⁸⁾。このことは、エコシステムの視座から社会資源を考察していく上で重要な点と考えられる。

太田義弘によるとエコシステムは、「人間の生活をシステムの思考方法を用い、生活構造という視点から理解可能な要素に分解して整理、分析し、それらの析出された要素の特質や統合化によって、生活機能とその流れを生活過程として生態学的に考察し、その生活の実体を事実にくした最適な方法で把握することである」⁹⁾と指摘している。すなわち、エコシステムとは利用者の生活を、その生活構造の内容と生活過程により変化していく流れから理解することができる概念であると考えられる。溝淵淳はエコシステムをソーシャルワーカーが利用者の生活を認識する際に、システムの思考とエコロジカルな視座との不可分な構成からなる包括・統合概念と位置づけ¹⁰⁾、その両者の関係を時間で変容する映画フィルムの1コマに例えて説明している¹¹⁾。また彼は、変化しつづける「生きたシ

システム」を認識する重要な概念であり、利用者の生活をとらえる認識の枠組みであると指摘している¹²⁾。さらに、秋山薊二も、エコシステム概念のように生活する人間の全体像を統合的にとらえることが、生活する人間の実態を動的に理解する見方を示していることを指摘し、このような視点は、人間と社会をとらえる明瞭な枠組みを生み出すと指摘している¹³⁾。このように、エコシステムとは、利用者の生活を広がりや時間の流れから、全体的に認識ができる枠組みもつ概念であると理解できる。

また、メイヤーはエコシステムの視座が、「ケースにおける人と環境の変数が相互に関連しあっている全体状況をとらえていくのに役立つ視点を提供する」¹⁴⁾のものであると指摘している。そして、中村佐織は「エコシステムは、ソーシャルワーカーに問題や対象を理解する広範で動きのある視点をもたせようとしている」¹⁵⁾と指摘している。このように、エコシステム概念はソーシャルワーカーに利用者の生活全体を認識する視座をもたらすものであると考えられる。

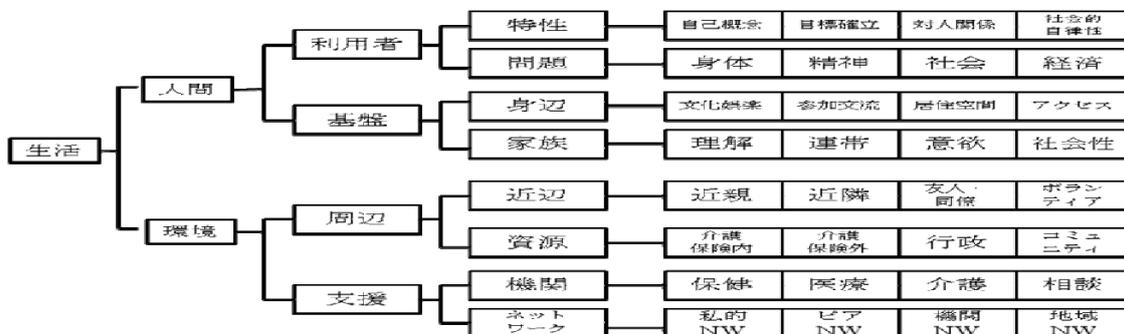
このようなことから、エコシステム概念の基本特性として、①利用者の生活の広がりを理解可能な要素から整理することができること、②時間的な変化から生活の変容を認識することができること、③利用者の生活を認識する枠組みがあること、④生活全体をとらえる広範な動きある視座をもたらすことができること、の4点があげられる。これらの特性は利用者の生活ニーズとつながる社会資源の項目やとらえ方、認識の仕方の枠組みにも同様に示唆を与えることが可能になると考えられる。

Ⅲ エコシステム視座からの社会資源の整理

エコシステムの特長には、生活エコシステムの構成と内容を整理する考え方がある。これは生活という生きざまをエコシステムとして実態に近似した概念と方法で理解しようというエコシステム構想に基づいている。このエコシステム構想は理論と実践をつなぐ具体的な実践方法であり、利用者の生活を把握するための枠組みを設定することを目的に構成されている。

小榮住まゆ子は、太田のエコシステムの考え方を基盤に、高齢者の生活支援過程を展開するために高齢者の在宅生活を系統的にとらえる枠組みとして、高齢者の生活エコシステムを図1のように構造化し、理論づけている¹⁶⁾。

図1 高齢者の生活エコシステム



(小榮住 2006年)

このようなエコシステム構想に基づいて作成された高齢者の生活エコシステム情報の構成と内容の考え方は、①「特性」はサクセスフル・エイジングや生きがい概念、②「問題」は重複かつ継続す

ることが多い多面的な問題のとらえ方、③「身辺」は心理社会的問題の緩和やQOLの向上、④「家族」は利用者中心に考えた家族、⑤「近辺」はインフォーマルな社会資源、⑥「資源」はフォーマルな社会資源、⑦「機関」は保健・医療・福祉の専門職や専門機関、⑧「ネットワーク」は多角的な把握、から枠組みが整理されている。このような枠組みは高齢者の生活の特性をとらえて再検討され、つくられているところに特徴がある¹⁷⁾。また、これに基づいて開発されたコンピュータによる高齢者生活支援ツールでの検証も実施されている。

しかし、彼女の研究は高齢者の生活理解とそこからの支援という大きなくりを視野に入れた研究であって、決して社会資源がどのような現状にあり、支援者がどうとらえ、どう活用していくのかということを中心とした研究ではない。その意味では、社会資源項目の精査が十分でないとも考えることもできよう。そこで、本稿では彼女の高齢者の生活エコシステムの枠組みに基づきながら、その枠組みを精査し、実践での汎用性について検討することにする。詳細な高齢者の社会資源の項目を整理するにあたり、現在の高齢者の生活課題や生活実態から示唆を得ることで、より実態に近い社会資源の項目を示していきたい。

現在、わが国において、全人口の高齢化と世帯規模の縮小、女性の雇用機会の拡大、子の扶養意識の変化や、その変化による家庭での介護能力の低下などによる高齢者の介護に関わる問題が顕著である。具体的には高齢者世帯の1世帯あたりの所得額の減少、通院者の高比率が生活上の問題としてあげられ、高齢者が生きがいをもって安心して暮らすために、要介護状態になる前の生きがい、健康づくりに向けての取り組みが生活課題となっている¹⁸⁾。

このような日本の高齢者の生活課題との関係では、国民生活白書¹⁹⁾や高齢社会白書²⁰⁾、国民生活選好度調査²¹⁾、厚生労働白書²²⁾をもとに、表1のような項目が社会資源としてあげられるだろう。そのなかで、育児や家事等高齢者のニーズに直結するかどうか明確でない項目については、孫の世話や家での役割等対応の可能性があると考えられる生きがいづくりの課題のなかに整理を試みた。

表1 高齢者の生活課題と生活実態における社会資源

高齢者の生活課題	『国民生活白書』	『高齢社会白書』	「国民生活選好度調査」	『厚生労働白書』
所得額の減少	経済	所得(公的年金・恩給 稼働所得 財産所得 仕送り) 資産 貯蓄 就業	収入 勤労	仕事
生きがいづくり	家族 社会 地域	こども 社会参加活動 就業	家族 文化 余暇 地域 勤労	家族 子孫 仕事 家事 育児 近所づきあい ボランティア 仕事
家庭での介護力の低下	家族 社会 地域 健康 福祉	こども 保健 医療 介護 福祉 住環境	家族 医療 保健	家族 子孫 保健 医療 福祉 介護 行政 近所づきあい
健康づくり	健康 福祉	社会参加活動 保健 医療 介護 福祉	教育 文化 余暇 休暇 地域 医療 保健	保健 医療 福祉 介護
通院者の高比率	健康	保健 医療	医療 保健	保健 医療

表1をみる限り、例えば、「近所づきあい」は楽しみになることもあることから生きがいづくりに対応する一方で、ご近所の見守りや訪問等家庭での介護力の低下にも対応することができるというように、一つの項目が複数のニーズに対応できるものとして整理することができる。また、同じ意味をもつ「所得」「経済」「収入」が別な用語で使われている。このように同じような意味をもつ用語については、①「経済」「所得」「収入」「資産」「貯蓄」では「経済」、②「勤労」「就業」「仕事」

では「仕事」、③「家族」「子ども」「子孫」では「家族」、と最も幅広くニーズに対応できる意味をもつ用語で整理した。

また、高齢者の生活実態に即した社会資源項目を整理するため、高齢者の生活エコシステムの社会資源項目と、生活実態からの社会資源項目を比較し、生活支援のための社会資源項目について表2のように整理を行った。本研究では、高齢者の生活エコシステム²³⁾の32内容を社会資源項目とすることから、その社会資源項目を整理する枠組みはその上位カテゴリーの8構成として位置づけることにする。ここでは、生活実態の項目の「医療」「保健」「福祉」「介護」等については、サービスとしてとらえると、「資源」の構成の枠組みで整理できるが、そのサービス提供者としてとらえると「機関」の構成で整理することもできる。このことから、社会資源をとらえる視点は複数存在しているといえる。

表2 文献から整理した社会資源項目

構成	高齢者の生活エコシステムの内容	生活実態からの社会資源項目	整理した社会資源項目
特性	自己概念 目標確立 対人関係 社会的自律性		自己概念 目標確立 対人関係 社会的自律性
問題	身体 精神 社会 経済	経済	身体 精神 社会 経済
身辺	文化娯楽 参加交流 居住空間 アクセス	文化 余暇 仕事 社会参加活動 住環境 家事	文化娯楽 仕事 家事 参加交流 住環境 アクセス
家族	理解 連帯 意欲 社会性	家族	家族
近辺	近親 近隣 友人・同僚 ボランティア	近所づきあい ボランティア	近親 近隣 友人・同僚 ボランティア
資源	介護保険内 介護保険外 行政 コミュニティ	保健 医療 介護 福祉 行政	介護保険内サービス 介護保険外サービス 行政サービス コミュニティサービス
機関	保健 医療 介護 相談	健康 保健 医療 介護 福祉	保健サービス 医療サービス 相談サービス
NW	私的 NW ピア NW 機関 NW 地域 NW	社会 地域	近隣のネットワーク 友人のネットワーク 同僚のネットワーク 地域のネットワーク

(小柴住 2006年、国民生活白書、高齢社会白書、国民生活選好度調査、厚生労働白書を参照して筆者作成)

社会資源項目は小柴住の考えに依拠するものの生活実態に合わせると、次の点に変更していく必要があった。

- ① 「身辺」では「居住空間」を家の中だけではなく、家から外に続く出入り口等を含めた「住環境」に、そして「仕事」「家事」を新たな項目とする。
- ② 「家族」では構成の項目を社会資源項目とする。
- ③ 「近辺」では高齢者の生活エコシステムの項目を社会資源項目とする。
- ④ 「資源」「機関」はフォーマルな社会資源を意味している。二つの領域に項目が重なりあうことから、「資源・機関」と一つの枠組みにし、一目でフォーマルな社会資源であることがわかるように、それぞれの項目にサービスと明記する。
- ⑤ 「ネットワーク」の「私的ネットワーク」「ピアネットワーク」は用語の意味について利用者にとってはあまりなじまない用語であると考えられるため、その内容を「近辺」の「近隣」「友人」等の社会資源項目に合わせ、わかりやすい言葉を用いた項目に変更する。また、「機関ネットワーク」は研究の対象が介護保険のケアマネジメントの対象者であることから、この項目を④のフォーマルな社会資源の枠組みで整理することにする。

IV 高齢者の生活全体をとらえる視座

これまで、高齢者の分野で行われてきた社会資源の情報収集や発掘、そしてその活用は、介護保険に基づくケアマネジメントでのアセスメントシートにゆだねられてきた。アセスメントシートそのものは収集した情報を処理し、利用者をはじめ関係者や専門職者たちに共通に理解できる情報、記録²⁴⁾であり、支援ツールとして現状では頻繁に使用されている。

また、アセスメントシートを活用することについて、福富昌城は、①系統立てた情報収集が可能となり、的確なアセスメントができやすくなる、②経験が浅いケアマネジャーであっても、情報収集の漏れを回避できる、③関係職種との間での情報の共有、連携に役立つ、という点で意義があると述べている²⁵⁾。さらに、アセスメントシートは、利用者の参加と協働のために、利用者とケアマネジャーが活用を共有できるツールとしての役割も大きい。

このようにシートの活用自体は、生活支援のツールとして意味があるという考えのもと実践されている。しかし、実際に高齢者ケアマネジメントのアセスメントシートは、利用者の情報の把握が中心で、高齢者の生活ニーズと結びつけた社会資源に着眼したアセスメントシートまでには至っていなかった。そのため、ケアマネジャーの支援は、従来の狭い範囲のアセスメントシートのもとに把握した社会資源のみで行うところが大きかったのである。その結果、利用者の生活支援という観点においては、ケアマネジャーの力量や勘と経験によって得ていた社会資源を活かす実践が展開されていたため、利用者にとっての満足度にもバラつきがあった。このことから、利用者の生活全体を幅広くとらえた生活支援からの社会資源のアセスメントシートの必要性がうかがえる。

次に、高齢者の生活エコシステムを基盤とする社会資源の枠組みの特性について検討してみたい。これについては、これまで整理してきた社会資源項目と代表的な介護保険のアセスメントシート²⁶⁾の項目を、高齢者の生活エコシステムの枠組みの中に表3のように整理してみた。具体的には、高齢者の生活エコシステムで整理した項目が各アセスメントシートの項目にあるかどうかをチェックした。この表をみる限り、従来の介護保険で使用されているアセスメントシートは利用者の「ネットワーク」に関する情報が無いことが理解できた。また、利用者の「特性」や「問題」の項目もほとんどなく、「家族」「近辺」といったインフォーマルな社会資源の項目についても不十分であった。しかし、一方で、「身体」に関する問題やフォーマルな社会資源に関する情報はどのアセスメントシートでも情報収集することができるとともに細項目が設けられ、さらに詳しい情報収集ができるようになっていた。このような偏りを改善するには、社会資源項目によって、フォーマル・インフォーマルな社会資源を全体的に把握することが重要である。また、表3からもわかるように、生活支援を視野に入れた社会資源の情報を把握するためには、エコシステム視座からの幅広いアセスメントを行わなければならない。

具体的に、この社会資源をとらえる枠組みは、高齢者の生活エコシステム情報の構成と内容²⁷⁾を参考に、社会資源の広がりや枠となる社会資源項目を縦軸に、そして、生活過程をふまえた社会資源活用過程を横軸に配置することにした。

まず、縦軸であるが、利用者のニーズに対応するのが社会資源であることから、まず、利用者自身のニーズと関連性が高い①「特性」「問題」、そして、生活基盤としての身近な社会資源である②「身辺」「家族」、③フォーマルな社会資源である「資源・機関」、④インフォーマルな社会資源である

「近辺」「ネットワーク」の4つで整理した。その際に、機関ネットワークはフォーマルな社会資源であることから²⁸⁾、ネットワークではなく「資源・機関」の枠組みのなかに配置した。

次に横軸であるが、ここでは、社会資源活用の特徴を活かし、支援が必要になる以前（過去）および現在の社会資源情報を配置することにした。それにより、利用者の社会資源活用の変化が、わかりやすくなるという利点があると考えられるからである。また、過去、現在をふまえて今後（未来）活用する社会資源を検討することが可能になると考えられる。

表3 生活の枠組みからみる介護保険のアセスメントシート

	社会資源項目	項目の内容・意味	全国社会福祉協議会方式	ケアマネジメント実践記録様式	包括的自立支援プログラム	日本訪問介護振興財団方式	日本介護福祉社会方式	MDS-HC方式
特性	自己概念	自己に対する考え方等					○	
	目標確立	人生や生活上の目標等						
	対人関係	対人との関係性・適応性等						○
	社会的自律性	周辺環境との関係性・適応性等						
問題	身体	身体的な衰えと病気に対する不安等	○	○	○	○	○	○
	精神	情緒的、心理的な身体的な保護に対する不安等					○	
	社会	役割喪失や生きがい喪失への不安等				○	○	
	経済	経済基盤への安定への不安等	○	○		○	○	○
身辺	文化娯楽	趣味や娯楽、楽しみ等	○	○	○	○	○	
	参加交流	社会参加、町内会・老人クラブ・三世代交流等		○	○			
	居住空間	住宅の状況・住み心地等	○	○	○	○		○
	アクセス	地域の諸機関・施設の利便性等	○					
家族	理解	家族のお互いの理解・協力等	○	○		○	○	○
	連帯	家族のまとまり等				○		○
	意欲	家族の問題解決への意欲等	○		○		○	○
	社会性	家族の家族以外の交流等					○	
近辺	近親	近親の協力等	○	○			○	○
	近隣	近隣住民の協力等	○	○			○	○
	友人・同僚	友人・同僚等の仲間の協力等	○	○			○	○
	ボランティア	ボランティアによる支援等	○					
資源	介護保険内	介護保険のサービス等	○	○	○	○	○	○
	介護保険外	社会福祉協議会、社会福祉法人、医療法人等	○	○	○	○	○	○
	行政	行政サービス等	○	○	○	○	○	○
	コミュニティ	住民参加型サービス、民生委員等	○	○	○	○	○	○
機関	保健	保健サービス等	○	○				
	医療	医療サービス等	○	○	○	○	○	○
	介護	介護サービス等	○	○	○	○	○	○
	相談	相談サービス等		○				○
NW	私的NW	友人・同僚等の仲間のネットワーク等						
	ピアNW	同じ悩みや状況にある人とのネットワーク等						
	機関NW	フォーマルな社会資源のネットワーク等						
	地域NW	地域のインフォーマルな社会資源のネットワーク等						

V 事例からみる社会資源活用の項目の精査

さらに社会資源活用の枠組みを精査し、実用化を図るために事例との関係で検証を試みた。具体的な事例については以下のとおりである²⁹⁾。

○事例紹介

Aさん 年齢：92歳 性別：女性 家族構成：長男夫婦と3人暮らし
 職歴：魚の行商 要介護度：要介護1

障害高齢者の日常生活自立度：J1

認知症高齢者の日常生活自立度：IIIa

【長男からの相談内容】

《5/1》 認知症にもかかわらず、行商にでかけていく。お金の計算ができず、交通ルールを守れないため、他人に迷惑がかかるので、行商をやめてもらい、かわりに通所介護を利用させたい。

【支援経過】

《5/25》 通所介護の利用開始。通所介護に行くことを本人に伝えてあったが、忘れてしまい、いつも通り朝4時に起きて魚問屋へ行く。気づいた長男が迎えに行き、自分の部屋にいるように促すも、そのことをすぐに忘れてしまい、また外に出ていく。通所介護のバスが来る8時45分まで、長男と長男の妻が交代で本人に付き添う。

《6/20》 その後も、魚問屋に行き、それに気づいた長男夫婦が迎えに行くということを繰り返している。通所介護の利用は継続しているものの、そわそわと落ち着きがなくなったり、家の中をぐるぐる回ったりと認知症の周辺症状が増大してきている。行商に行くことを止められる理由がわからず、外に出ていこうとするため、長男夫婦は本人から目が離せず、介護疲れが増大している。本人は以前より歩かなくなったため、足腰が弱くなった。また、「さみしい」とよく言うようになった。

この事例について、現在、わが国で最も多く活用されている全国社会福祉協議会のアセスメントシートと比較してみると表4のような結果になった。ここで、これまでのシートにない新たな視点が明らかになった。まず、生活の広がり構成している縦軸の項目についてみると、「さみしい」という利用者の精神的な問題については、介護保険のアセスメントシートでは、その原因が難聴によるコミュニケーションの困難さと理解されていた。しかし、新たな社会資源活用の枠組みではその原因が、同じ「問題」の枠組みのなかにある行商に行けなくなったことと関連していると考えることができる。なぜならば、この利用者は「支援が必要になる前」では、魚の行商を通して知り合った地域の常連客・魚問屋の人々との会話が楽しみであり、行商仲間や魚問屋の人々、そして常連客といった地域ネットワークをもっていたにもかかわらず、現在はそれを活用できずにいるということが把握できるからである。

このような社会資源項目は一つの項目の内容を別の項目の内容と関連づけて理解する手がかりになると考えられる。例えば、保育園帰りのひ孫とふれ合うことが、利用者の楽しみの一つになっていることなど、その他の項目でも同様にとらえることができる。また、利用者の生活における社会資源の広がりからは、その地域生活における社会資源の結びつきをとらえることができると考えられる。通常、介護保険のアセスメントシートでは、利用者の生活を家族、近親、通所介護、地域見守りネットワーク等のつながりで成り立っていると理解する。しかし、新たな社会資源項目では、それ以外にも愛犬や小学校の子どもたちの見送りなどのインフォーマルな利用者固有の社会資源を含めて生活が成り立っていることを理解するのである。次に、社会資源活用過程としての横軸についてである。この事例では、「支援が必要になる前」と「現在」への過程の中で、社会資源活用の範囲が狭くなっているということがわかる。特に、インフォーマルな社会資源とのつながりが減ってきていることが理解できる。そして、それを縦軸の関連でみていくことにより、そのことが、「さみしい」という問題を引き起こす要因になっていると理解することができるのである。

このように、エコシステム視座をもとに検討した社会資源活用の枠組みは、①インフォーマルも含

めた偏りない社会資源の情報収集ができる、②利用者と社会資源とのつながりを地域生活の全体からとらえることができる、③社会資源活用の変容から生活の広がりの変化をとらえることができる、④社会資源活用の広がりや時間的な変化から、生活全体の変容とその要因を理解することができる、という4点を実現する可能性をもつと考えられる。

表4 介護保険アセスメントシートとの項目の比較

	社会資源項目	全国社会福祉協議会方式	社会資源活用過程	
			支援が必要になる前	現在
特性	自己概念		親しみやすい 働きの 誰とでも気軽に話しができる	親しみやすい
	目標確立		いつでも元気であること	行商に行くこと
	対人関係		いきいきサロンの人たちと仲がよい 行商の常連客や魚問屋の人たちと仲がよい	いきいきサロンの人たちと仲がよい
	社会的自律性		周囲の雰囲気に合わせて行動できる	通所介護では周りをみながら行動している
問題	身体	難聴のため、大きい声でないと聞こえない	難聴のため、大きい声でないと聞こえない 認知症(物忘れ 徘徊 不穏) 足腰が弱くなってきている	難聴のため、大きい声でないと聞こえない 認知症(物忘れ 徘徊 不穏) 両下肢の筋力低下 外出時はつかまることが必要
	精神	さみしい	特になし	さみしい
	社会		特になし	魚の行商ができなくなった
	経済	経済的には困っていない	経済的には困っていない	経済的には困っていない
身 辺	文化娯楽		愛犬ラッキーとのふれあい ひ孫とのふれあい K温泉の園芸鑑賞 常連客・魚問屋の人々との会話 お茶のみ仲間との会話	愛犬ラッキーとのふれあい ひ孫とのふれあい 登校する小学校の子どもたちを見送ること
	仕事		魚の行商	なし
	家事	犬のエサやり	犬のエサやり 犬の散歩	犬のエサやり
	参加交流		老人会の日帰り旅行	特になし
	住環境	持ち家 1階に自室あり 家の隣に小学校がある	持ち家 1階に自室あり 家の隣に小学校がある	持ち家 1階に自室あり 家の隣に小学校がある
	アクセス	地鉄バスの停留所が近い	地鉄バスの停留所が近い	地鉄バスの停留所が近い
	家族	長男の受診介助 長男の妻の日常の世話(調理・洗濯・掃除など) 長男夫婦は介護疲れで疲労困憊している	長男の受診介助 長男の妻の日常の世話(調理・洗濯・掃除など)	長男の受診介助 長男の妻の日常の世話(調理・洗濯・掃除など) 長男夫婦は介護疲れで疲労困憊している
近 辺	近親	近くに住むひ孫が保育園の帰りに訪問	近くに住むひ孫が保育園の帰りに訪問	近くに住むひ孫が保育園の帰りに訪問
	近隣	なし	お隣の家のMさんとの会話 タバコ屋のHさんとの会話 (本人宅で毎日、3時にお茶をしている)	なし
	友人・同僚	なし	なし	なし
	ボランティア	なし	なし	なし
N W	近隣のNW		隣の家のMさん、同じ町内のOさんとのつながり	なし
	友人のNW		お茶のみ友達とのつながり	なし
	同僚のNW		行商仲間とのつながり 魚問屋の人々とのつながり	なし
	地域のNW		常連客のつながり	なし
資 源 ・ 機 関	介護保険内サービス	通所介護(週3回)	なし	通所介護(週3回)
	介護保険外サービス	なし	スーパー宅配サービス	なし
	行政サービス	無料入浴券の給付	無料入浴券の給付 市リハビリ教室 介護予防教室	なし
	コミュニティサービス	地域見守りネットワーク(福祉推進員)	ふれあい・いきいきサロン	地域見守りネットワーク(福祉推進員)
	保健サービス	なし	保健師(介護予防教室にての健康チェック)	なし
	医療サービス	かかりつけ医の診察	PT(介護予防教室によるリハビリ体操) かかりつけ病院での受診	かかりつけ医の診察 通所介護での健康チェック
	相談サービス		ふれあい・いきいきサロンでの出前相談	ケアマネジャーの相談 通所介護ソーシャルワーカーの相談

VI おわりに

本稿では、ケアマネジメント実践における社会資源を利用者の生活全体からとらえるための枠組みについて検討を進めてきた。特に、生活支援のための社会資源活用を具現化するために、ソーシャルワーク固有のエコシステム視座を基盤に、高齢者の生活実態を反映させた社会資源項目を精査した。また、実践活用の可能性を明確にするために、既存のアセスメントシートとの比較や、事例を用いて検討を進めた結果、文献研究から導き出された社会資源項目はフォーマル、インフォーマルな社会資源をトータルにとらえることができる視座をもたらすものであった。特に、インフォーマルな社会資源を情報収集することにより、これまでの介護保険のアセスメントシートでは情報収集することがで

きなかった利用者の地域でのつながりや結びつきをとらえることができた。

今後の高齢者の生活支援においても、地域包括ケアを根幹とした支援が求められることが予想される。その上で、地域の生活者として利用者をとらえ、利用者が住み慣れた地域で生活し続けることを実現するためのケアマネジメント実践が重要視されるであろう。本稿では、利用者の地域生活支援の実現を目指し、まずはその第一歩として、社会資源の枠組みとその活用についての考察を試みた。今後は実践活用における汎用性について検討していきたい。

〈注〉

- 1) Moxly, D. P., *The Practice of Case Management*, Sage Publications, 1989, p.17.
Rubin, A., "Care Management", *Social Work*, Vol.28, No1, National Association of Social Workers, 1987, pp.49-54
Holt, B. J., *The Practice of Generalist Case Management*, Allyn & Bacon, 2000, p.2
Orme, J. & Glastonbury, B., *Care Management: Tasks and Workloads*, Macmillan, 1993, p.4
Challis, D. & Davies, B., *Case Management in Community Care*, Gower, 1986, p.1
SSI & SWSG, *Case Management and Assessment Practitioners' Guide*, The Stationery Office, 1991, p.11
白澤政和 『ケースマネジメントの理論と実際』 中央法規 1992年 11頁
佐藤信人 『介護サービス計画(ケアプラン)作成の基本的考え方・試論ノート』 全国介護支援専門員連絡協議会 2004年 5-6頁
橋本泰子 「地域ケアとケアマネジメント」 『社会福祉研究』 第80号 鉄道弘済会 2001年 93-94頁
- 2) 白澤政和 「社会資源論」 『大阪市社会福祉研究』 第10号 大阪市社会福祉協議会 1987年 10頁
小坂田稔 『社会資源と地域福祉システム』 明文書房 2004年 52-58頁
- 3) 白澤政和 前掲論文 28頁
- 4) 菊池信子 「ケアマネジメントと社会資源—利用者側の資源活用—」 『ソーシャルワーク研究』 Vol.22 No1 相川書房 1996年 37頁
- 5) Meyer, C. H. (ed.), *Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*, Columbia University Press, 1983
- 6) 狭間香代子編著 『ソーシャルワーカーとケアマネジャーのための相談支援の方法』 久美出版 2008年 39頁(狭間香代子執筆部分)
- 7) Miley, K. K., O'Melia, M. & DuBois, B.L., *Generalist Social Work Practice: An Empowering Approach*, Allyn & Bacon, 1998
- 8) 狭間香代子編著 前掲書 39-40頁(狭間香代子執筆部分)
- 9) 太田義弘 『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』 誠信書房 1992年 108頁
- 10) 太田義弘 中村佐織 石倉宏和編著 『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング—利用者参加へのコンピュータ支援』 中央法規 2005年 24-25頁(溝渕淳執筆部分)
- 11) 同書 42頁(溝渕淳執筆部分)

- 12) 同書 24 頁(溝渕淳執筆部分)
- 13) 太田義弘 秋山薊二編著 『ジェネラル・ソーシャルワーク』 光生館 1999 年 51 頁 (秋山薊二執筆部分)
- 14) Meyer,C.H., *Social Work Practice: The Changing Landscape* (Secod Edition), The Free Press, 1976, p.129
- 15) 中村佐織 『ソーシャルワーク・アセスメントーコンピュータ教育支援ツールの研究ー』 相川書房 2002 年 33-34 頁
- 16) 小榮住まゆ子 「高齢者ソーシャルワークにおける支援ツールの開発ーエコシステム構想の活用を通じてー」 『関西福祉科学大学紀要』 第 10 号 関西福祉科学大学 2007 年 268 頁
- 17) 小榮住まゆ子 「高齢者ソーシャルワークの科学化にむけた実践事例研究ーエコシステム構想の活用を通じてー」 『関西福祉科学大学紀要』 第 11 号 関西福祉科学大学 2008 年 267-269 頁
- 18) 厚生統計協会編 『国民の福祉の動向』 財団法人厚生統計協会 2009 年 112-114 頁
- 19) 内閣府 『平成 20 年版国民生活白書』 時事画報社 2008 年
- 20) 内閣府 『平成 22 年版高齢社会白書』 佐伯印刷株式会社 2010 年
- 21) 内閣府 「平成 21 年度 国民生活選好度調査」 内閣府ホームページ
(http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h21/21senkou_03.pdf) 2011 年 1 月 4 日アクセス
- 22) 厚生労働省 『平成 22 年版厚生労働白書』 日経印刷 2010 年
- 23) 小榮住まゆ子 前掲論文 2007 年 268 頁
- 24) 中村佐織 前掲書 57 頁
- 25) 白澤政和・渡辺裕美・福富昌城編 『ケアマネジメント』 中央法規 2002 年 38 頁(福富昌城執筆部分)
- 26) 在宅版ケアプラン作成方法検討委員会編 『改訂新・居宅サービス計画ガイドライン』 全国社会福祉協議会 2006 年
社団法人日本社会福祉士会編 『改訂ケアマネジメント実践記録様式Q&A』 中央法規 2006 年
介護療養型医療施設連絡協議会 全国老人福祉施設協議会 全国老人保健施設協議会編 『新包括的自立支援プログラム』 全国社会福祉協議会 2003 年
日本訪問看護振興財団監修 佐藤美穂子 田久保恵津子 宮内清子編著 『自立をはかり尊厳を支えるケアマネジメント事例集』 中央法規 2004 年
日本介護福祉士会編 『自立支援アセスメント・ケアプラン作成マニュアルー生活7領域から考えるー』 中央法規 2008 年
ジョン N.モリス編著 池田直樹訳 『日本版 MDS-HC2.0ー在宅ケアアセスメントマニュアル』 医学書院 2004 年
- 27) 小榮住まゆ子 前掲論文 2007 年 269 頁
- 28) 白澤政和 前掲書 119 頁
小坂田稔 前掲書 56 頁
- 29) 倫理的配慮として個人名等アルファベット表記とし、個人が特定できないよう配慮している。本人、家族に対して説明を行い、了解を得た。